

《書 評》

John Ma, *Statues and Cities: Honorific Portraits and Civic Identity in the Hellenistic World*

Oxford: Oxford University Press, 2013, Pp. xxvi+378.

酒 嶋 恭 平

「エヴェルジェティズム」、すなわち有力者による寛大な恵と行為の慣行は、P. Veyne が提唱して以来広く受け入れられ、古代地中海世界を分析するのに不可欠な概念の一つに発展した¹⁾。特にギリシア史研究においては、P. Gauthier らによって実証的研究が進展し、現在では、ポリス精神の連続性を示すものとして評価されている。彼の成果や P. J. Rhodes らの研究を分水嶺として、ヘレニズム時代におけるギリシア史研究はさらなる活気を帯びている²⁾。

さて、こうした恵と行為に対する返礼には、顕彰碑文、劇場における顕彰の布告や特権座席付与など様々なものが存在するが、その一つに立像の建立が含まれる。こうした立像は、象牙や大理石から掘り出した彫像や、鑄造された銅像であり、ヘレニズム時代に増加する考古資料として、碑文史料などと共に注目されてきた³⁾。もともと、アルカイック期から古典期にかけては、神々への奉納物として、神々をかたどって建立されるものであり、例外的に人間を表す程度だったのが、前 4 世紀以降、恵とへの返礼や、競技会の勝利者や軍事的功績を顕彰するものとして人間に対しても贈られるようになったらしい。ヘレニズム時代に入ると、ヘレニズム諸王を含むポリス内外の有力者の恵と行為に対する返礼として、積極的な建立がみられる。前 2 世紀頃には、諸王朝の勢力衰退に伴い、諸王への立像建立は減少傾向をみせるも、私的に建立された立像が増加し、「名誉のインフレ」と呼ばれる状態になる。やがて東方に到来したローマ人たちを、そしてローマ皇帝をも巻き込んで展開するこのような「立像文化」は、ヘレニズム時代を彩る特徴と表現してよいだろう⁴⁾。本書は、こうした立像を分析の中心に据え、ヘレニズム時代における、立像に関して発生するポリス内外の有力者や都市エリートと市民イデオロギーの力関係、そして顕彰による立像が持つ「表象」や「記憶」といった機能の検討を大きな目的とするものである。

本書の内容に移る前に、簡単に著者の紹介をしよう。J. Ma は現在、オックスフォード大学コーパス・クリスティ・カレッジのフェローとチューターを務める。以前はヘレニズム時代の小アジアを専門としており、2000 年には、アンティオコス 3 世と小アジアのギリシア諸都市を対象として、碑文を基本史料とした研究書を上梓している⁵⁾。その前後から研究の幅を広げ、ヘレニズム時代におけるギリシア諸都市の立像を中心に、多数の論考を発表して

きた⁶⁾。

では、本書の内容を順に紹介しよう。本書の構成は以下の通りになっている。

Introduction

I Statues and Stories

1. Towards a Grammar of Honours
2. The Politics of the Accusative

II Statues and Places

3. Statues in their Spaces
4. Statues in their Places

III Statues and Families

5. The Shape of Private Monument
6. Public Spaces, Private Statues

IV Statues as Images

7. Making an Honorific Portrait
8. Looking at an Honorific Portrait

Conclusion

なお著者は、網羅的な史料分析でなく、特定の例を挙げて分析し、それを大きな文脈に位置付ける、という手法をとっており、そのため本書は、第Ⅰ部から第Ⅲ部までの各部では、前半部（第1, 3, 5章）を特定の事例分析とそれに関する理論の構築に、続く後半部（第2, 4, 6章）を具体的な現象の分析と、その本書全体の目的との文脈付けに、それぞれ割り当てる、という構成となっている。

まず「序論（Introduction）」において、本書で扱われる顕彰や立像の歴史的変遷を概説し、そして本書における分析の方法が提示される。著者は、近年盛んに試みられているように、従来別個の文脈でなされてきた碑文学、美術史、考古学という3分野の統合的な考察を試みる。この考察を通して、共同体のイデオロギーや、ポリスという社会空間における共同体とポリス内外の有力者との相互作用を明らかにする。その上で、ヘレニズム時代の大きな問題の一つであるポリスの在り方に検討を加えることが、本書の全体の目的である。また同時に、表象、イメージ、身体、記憶といった広範な文化史的テーマも本書の射程に含むことが述べられる。

第1部「立像とストーリー（Statues and Stories）」で分析の対象になるのは、顕彰による立像に付随する碑文に刻まれた文言である。第1章「顕彰の文法に向けて（Towards a Grammar of Honours）」は、そうした文言を決定する規則や慣習（著者はこれらを「文法（grammar）」と表現している）の確立が目標となる。そこでまず、文法上の格が分析される。ここで著者

は、主格が持ちうる効果を強調する。主格は行為の主体であることを表し、一般的に神々や英雄、有名な人物に対して用いられる。そのため主格には、主格が用いられた人物に強力な存在感と主体性を付与する側面があるのだという。顕彰の立像は、受け手に対する主格の使用を避けることで、誰が名誉を与えているのか、という主体を明確にするのである。

次に著者は、顕彰を与える行為の主体として共同体を主格、被顕彰者を対格で表現し、立像を表す εἰκών 等の表現を排する、という要素を軸に構成される2つの定型句の分析に移る。起源を含む歴史的な変遷や視覚的な側面に鑑みると、定型句は、市民決議に始まる建立の過程を、とりわけ顕彰を与えるという市民の処置を表現しているのだという。また著者は、モニュメントとして碑文を扱うことにより、それ自体が持つ視覚的な力を強調する。どのような形状のモニュメントのどこに、どのように碑文が刻まれるのか、刻まれる文言同士はいかなる位置関係にあるか。これらは、みる者 (viewer-reader) が受けるモニュメントのイメージを構成しており、特に定型句が用いられる場合に、そのイメージというのは、モニュメントを建立した主体としての共同体が明確化されるという。立像の台座自体に目を移すと、それらは例えば弁論家や競技の勝利者が立つ壇などを彷彿とさせる形状をとることで、被顕彰者が市民であることを喚起する。このように立像に付随する碑文は「見る」「聞く」という実践を通して、立像を市民文化と制度に「埋め込む (embed)」機能を持つのである。

第1章での分析を基に、第2章「対格の政治 (The Politics of the Accusative)」では、上述の定型句が持つ政治的な力について検討が加えられる。定型句は、モニュメントの主体が社会や政治制度等、市民の政治に含まれる様々な要素間の関係であること、そして顕彰する行為の主体が「(共同体の) 人々」であることを表現している。「モニュメントの主体は、もしかすると立像の主体さえも、(例えば) ソーテレースではなく、『人々がソーテレースを称揚した／を捧げた』⁷⁾と、この処置によって創られる関係である・・・」という著者の表現は、主張の要点をよく表しているだろう。この中で、対格によって表される被顕彰者は文字通り行為の受け手、処置の受け手として、優越性を制限される。定型句は被顕彰者を、共同体による顕彰の過程や処置、そして共同体の規範の一部としてしまう機能を持つのである。その結果、顕彰によるモニュメントは、エリートによる共同体支配の表象ではなく、共同体の主体性や市民の価値観を示し、「良き市民」を再生産することに従事することになるのである。しかしながら、共同体の記憶は時と共に移り変わるものであり、モニュメントの存在が問題となることがある。その場合に取られる、碑文の文言を刻み直すなどの再利用措置は、共同体の「記憶」としての、また共同体の関係性の産物としてのモニュメントの位置付けを明らかにしている、と著者はいう。

続く第2部「立像と場所 (Statues and Places)」では、地理と空間の両面から、立像の配置が表す政治的・イデオロギー的意義を問う。前半部である第3章「空間における立像 (Statues in their Spaces)」で論じられるのは、共同体内部のこういった場所に顕彰モニュメン

トが配置されるか、ということであり、ここでも、第1章と同様に「空間の文法 (grammar of space)」という「文法」の確立が目的になる。アゴラ、神殿、体育場、劇場や集会場などの、立像が建立される主要な場所を簡潔に考察した上で著者は、その場所に立像を建立することの意図、そしてその場所が立像に対して付与する意味を析出する。その上で、プリエネ、ペルガモン、アテナイという史料の豊富な3都市を例にすることで、実際に生じる多様性を強調する。また、都市との位置関係によって性質が変化しうる例として、都市内にも、都市から遠く離れた場所にも建立されうる神殿が検討されている。

第4章「場所における立像 (Statues in their Places)」は、個々の場所、つまり同じ空間内部における立像の位置関係から、近接する立像や設置される場所と相互に意味を構築するという、立像と空間の関係を探る。ここでも、共同体の役割が強調される。例えば、重要な場所に建立されることにより、立像は共同体の空間の一部となる。近接して建立されて列をなす立像は、シリーズ化されることによって均質化したものと映り、優越性が弱められる。さらに長年にわたってポリスがその空間を保持してきた歴史を視覚化するという役割をも持たせられる。しかし、シリーズ化は別の戦略として用いられ、空間を分断し、新たな意味を創り出す場合もある。著者が重要視するのは、単なる共同体の支配する場という見方ではなく、エリートと共同体の相互作用の場としての公的空間なのである。

第1部、第2部では、公的な顕彰としての立像が主に分析されてきたのに対し、第3部「立像と家族 (Statues and Families)」では、私的顕彰立像 (private honorific statue) に焦点があてられる。その類似性や分類の難しさから多様な分類が存在してきたものの、本書では、エリートの家族や近親だけでなく、王やその廷臣・友人関係をも含む個人や個人的なグループによって、ある個々人に対して建立されたものを、私的顕彰立像、家族による顕彰モニュメントとして定義している。

第5章「私的モニュメントの形 (The Shape of Private Monuments)」では、第1部、第2部での議論を援用した私的立像やモニュメントの分析、すなわち、私的立像に付随する碑文に刻まれる文言とそこから得られる情報や立像の形状や配置が分析・分類される。さらに、そうした立像が建立された際の葬送や記念、養子縁組といった状況や、建立の動機が析出される。特に動機の析出においては、公的な価値への興味や公的立像との類似点が提示される。以上の分析によって著者が定義する私的立像の建立における慣習は明確になる。そして著者は、次章への布石として公的立像と私的立像を対応する存在として提示するのである。

第5章での分類・分析を基に、第6章「公共空間、私的立像 (Public Spaces, Private Statues)」では、エリートと共同体という2つの視点から公的立像と私的立像の関係を考察する。エリートによって建立される家族のモニュメントは、あくまでも共同体の規範に基づいた表現がなされる。その点において、ギリシア都市の「衰退」というパラダイムで家族のモニュメントを解釈するのは誤りである、と著者はいう。共同体の規範を表現することから、第1部、2部で見たような公的な立像と同様に私的な立像は、共同体内部に対しては市民の価値

観やイデオロギー、そして理想的な市民のあるべき姿を再生産するという役割を持つことになると同時に、共同体外部の人々に対して、領域の明示といった機能を持つことにもなる。しかしまた、価値を形成する機能を持つ立像が、エリートの手で建立されることによって、エリートがその共同体の規範を変える可能性が生じるのである。さらに、私的な立像は富裕さ、権力といった貴族的価値観をも保持するのであり、この存在を共同体が許容するということは、社会的不平等や格差を共同体が容認することを意味する。このように著者は、どちらかが勝利するという単純な図式ではなく、共同体とエリートの相互に作用し、または均衡する結果として生じる様々な可能性を描き出している。

第4部「イメージとしての立像 (Statues as Images)」は、これまでとは異なる構成である。まず第7章「顕彰の肖像をつくる (Making an Honorific Portrait)」では、顕彰としての立像の、文字通り建立過程が示される。すなわち、いかにして立像の建立が決定され、誰によってどこでどのようにその立像が製造されたのか、という問いに焦点があてられる。ここでも著者は主体性、つまり、立像を作る芸術家間での交渉過程における、共同体や個人が果たした役割に注目する。

そして第8章「顕彰の肖像を見る (Looking at an Honorific Portrait)」では、まず立像の外見について類型化が図られる。著者によると男性、王、女性という3つのカテゴリーに類型することが可能だが、しかしこれらのカテゴリーに入りきれない多くの例外が存在するのだという。同時に、コンテキストが不鮮明であるために解釈することができない立像が多く存在することも指摘される。ここで著者は、前280年代のアテナイ、前146年以降のペロポネソス半島におけるポリュビオスの彫刻、前120年頃のプリエネとデロスという、比較的史料に恵まれ、コンテキストを窺うことのできる3つの時期をケース・スタディとして用い、分析を試みる。ここでは、各々の事例に共同体の持つ主体性が強調され、簡潔ながらもこの章までの議論を補強し実証する役割が与えられている。

最後に「結論 (Conclusion)」では、ここまでの考察をまとめた後、顕彰による立像の総合的な叙述を著者は試みる。古典期から古代末期まで射程に収めたこの叙述の中で、モニュメントの「公的」と「私的」という2つのジャンルが融合していく過程を描き出す。この融合は、私的立像の増加、多様化によって生じる、ローマ時代のポリスの風景に結実する、という。ここで強調されるのは、ローマ時代を通した、生き生きとした共同体の姿である。共同体とエリートの絶えざる相互作用と競争、そして2者の共存が、共同体の公的空間において長きにわたって発生し続けたのである。

最後に著者は、モチーフになった人物が立像としてその場に「現在 (presence)」するが同時に実際には「不在 (absence)」である、というパラドックスや、自然主義による表現、市民の規範として理想化される効果など、美学や図像学的な観点を中心に考察を進める。そして、芸術作品として「身体」を与えられると同時に理想化されることを伴う立像の建立は、そのために、人々が欲するものであった、と結論付ける。

以上が本書の概要である。本書の特徴はなによりも、その分析方法にある。著者は立像を、共同体と外部の権力者、あるいは共同体とエリートの、ポリスという空間における競争や相互作用の表象とみなし、その考察を進める。それに留まらず、立像によって、空間のイメージや共同体の規範が構築されると考える。こうした捉え方には、著者が本文中で示唆するように、H. Lefebvre らの都市論や地理学の影響が見られる。その構築主義的な態度から、近年における文化史研究の試みの一つとみてよいかもしれない。以上の手法に基づいて著者はヘレニズム時代のギリシア諸都市の共同体に注目する。そうすることで本書は、ヘレニズム時代からローマ時代にも一貫して続く共同体の活力を強調し、ヘレニズム時代のギリシア諸都市における共同体が持つ主体性や、共同体的文化の継続・発展といった側面を明らかにできたのだろう。近年隆盛を見せているヘレニズム時代のポリス研究とその手法の拡大、文化史研究の潮流の上に本書が位置付けられるのではないだろうか。

本書の試みは、碑文に刻まれるテキストの読みを重視する従来の研究に対し、空間利用をも含む検討、例えばどの場所に、いかなる配置でモニュメントが建立されたのか、という具体的な検討の必要性を改めて喚起するものとなるだろう。またモニュメントと空間の関係性のみならず、モニュメントとそれを見る者との関係も考慮に入れなければならない。

最後に、本書を読んだ上で、そこから評者が議論を進めるべきと感じた論点を開示しよう。

まず評者は、奉納物としての立像の側面に注目したい。著者が述べるように、定型句の一つは元来奉納に関して用いられており、主格と対格のみで表現されていても奉納物として同時代人に認識されていたことが示されている。しばしば碑文に「神々に(θεοῖς/τοῖς θεοῖς)」と刻まれることは、やはり奉納物としての一面を表しているのだろう⁸⁾。また、私的な立像についても聖域や神殿に、神官を務めた記念であるとか、家族の死など宗教に関連深いであろう出来事の際に建立されている。そもそも立像は奉納物としての起源が多分にしてあった。こうした宗教的側面を軸にすれば、立像の慣習全体を俯瞰し、その異なる側面を描き出すことや、碑文や他の奉納物との関連において立像を分析することが可能となるのではないだろうか。そうすることで、著者の議論の厚みを増すことにもなるだろう。

宗教との関連においては、人の流動性が増すヘレニズム時代には、ギリシア人たちは彼らにとって全く未知の宗教に出会うことがあった。彼らはそうした宗教に影響を受け、母国の伝統的な宗教を再開する傾向にあったという⁹⁾。この議論は、共同体の空間利用を見た共同体外部の人々がいかに影響され、母国でどのような行動をとったのか、という分析視角の可能性を示すと思われる。

著者の議論を各都市、各事例において実践する試みも必要となろう。その際、何らかの時間的区分を考慮に入れることによって、より動態的な共同体の在り方を明らかにできる可能性はある。史料状況は貧弱ではあるが、試みる価値はあるだろう。例えば評者が研究しているヘレニズム時代のアテナイでは、前 322 年と前 228 年をそれぞれ契機として、アクロポリスに建立される立像の変化が考古学的調査から明らかになっている¹⁰⁾。前 228 年を境に、従

来アクロポリスには存在しなかった外国人の肖像が建立され始めることは特筆に値しよう。ここからは、アテナイ人の意識に生じた何らかの変質がみてとれる。このような区分によって空間的な変遷をさらに加味すれば、より多彩で動態的な共同体の像を明らかにできる可能性はあるのではないだろうか。

上に挙げた例は、他に類をみない程豊富な史料を持つアテナイだからこそ提示できるのかもしれない。今の評者には他都市について例示することも、また、著者の理論を実践し、その歴史的な妥当性を検討する力量もない。しかしながら著者の本書における試みが、ヘレニズム時代のポリスの、生き生きとした新たな側面を描き出す可能性をもたらすことは明白であろう。

註

- 1) Veyne, P., *Le pain et le cirque: sociologie historique d'un pluralism politique*, Paris, 1976 (P. ヴェーヌ『パンと競技場』(鎌田博夫訳) 法政大学出版局, 1998 年)。
- 2) Gauthier, P., *Les cit  grecques et leur bienfaiteurs (IVe-Ier s. av. J.-C.). Contribution   l'histoire des institutions*, Paris, 1985; Rhodes, P. J. with D. M. Lewis, *The Decrees of the Greek States*, Oxford, 1997; cf. D. G. J. Shipley with M. H. Hansen, "The Polis and Federalism", in G. R. Bugh (ed.), *The Cambridge Companion to the Hellenistic World*, New York, (2006), pp. 52-72. 以上の議論については橋場弦(編)・師尾晶子・長谷川岳男「ギリシアの「衰退」とは何か」『西洋史学』234 (2010) 49-60 頁に簡潔にまとめられている。
- 3) ヘレニズム時代における立像については, Smith, R. R. R., *Hellenistic Sculpture: A Handbook*, London, (1991) pp. 7-18 を参照。我が国においても, ロドス島の彫刻に関して, 芳賀による網羅的な研究がある(芳賀京子『ロドス島の古代彫刻』中央公論美術出版, 2006 年)。
- 4) このような立像を建立, 授与する習慣は, 「statue habit (立像慣習/彫像慣習)」や「statue culture (立像文化/彫像文化)」と呼ばれ近年注目を集めている。周藤芳幸「コノンの像——古典期アテネにおける彫像慣習の一考察——」『西洋古典学研究』61 (2013) 36 頁を参照。
- 5) Ma, J., *Antiochos III and the Cities of Western Asia Minor*, Oxford, 2000.
- 6) 著者の経歴に関しては, オックスフォード大学コーパス・クリスティ・カレッジのホームページを参照した。(<http://www.ccc.ox.ac.uk/Fellows/f/13/> <2013/8/29 閲覧>)
- 7) 本書評中では扱う紙幅はなかったが, 著者によると, 「～の像を建立する (set up a statue of...)」とか, 「人々が X (の像) を神に捧げる/X (を像として) 神に捧げる (The people has dedicated (this statue of) X/X (qua statue) to the gods)」などとしばしば訳される ἀνατίθημι は, 字義通りに訳すならば「～を捧げる」という意味になるという。この語句と定型句, 立像の組み合わせによって生じうる意味を加味した上で著者は, 本書中では「X が Y を Z に建立する/捧げる (X has set up/dedicated Y to Z)」という訳を概ね採用し, 使い分けている (例を挙げると, 「Z に (to Z / 例えば『神々に (θεοῖς/τοῖς θεοῖς)』)」という表現が見られない場合には「X が Y を建立する」という訳を採用している)。
- 8) 公的碑文の奉納物としての側面に注目した研究については, 師尾晶子「古代ギリシアの碑文研究の新潮流——碑文習慣をめぐる——」『西洋史学』242 (2011) 57-69 頁を参照。
- 9) Mikalson, J. D., "Greek Religion: Continuity and Change in the Hellenistic Period", in G. R. Bugh (ed.), *op.cit.*, pp. 208-222.
- 10) von den Hoff, R., "Tradition and Innovation: Portraits and Dedications on the Early Hellenistic Akropolis", in O. Palagia and S. V. Tracy (eds.), *The Macedonians in Athens, 322-229 BC*, Oxford, (2003), pp. 173-185.